法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

回想断片(回想三〇年 ： 法政大学日本文学科の歩み)

宇和川, 匠助

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
11
(開始ページ / Start Page)
79
(終了ページ / End Page)
80
(発行年 / Year)
1965-03-23
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019106

回想三〇年——法政大学日本文学科の歩み

1960.6.「安保闘争」に参加した法政大学教授団

本誌の前身「国文学誌要」が創刊されてから約三〇年たった。それは隆昌と発展の歴史というより、国の内外をおおう激動の中で学問の灯が守られ、文学が試されてきた年月であった。その苦難と試練をいささかでも「明日」に役立てたいとの意図からここに小特集を送る次第である。

回想断片

宇和川　匠　助
（昭和七年三月（第五回）卒業）

雑誌国文学（学燈社）の日記文学特集号の文献目録をみていると、わたくしが昭和七年ごろ、研究室の助手を二、三ケ月していたとき、「国文学誌要」に書いた「和泉式部日記」の論文が目についた。

何を書いたか記憶もないし、当時の誌要がわたくしの手もとにあるわけでもない。誰がどのようなところからさがしだして記載したものか、とにかくなつかしい思いがした。

あのころの国文学の研究室は、マンモス化したこんにちの母校の敷地の中に今も存在しているのか、それとも撤去されてしまったのか知らないが、六角形の鉄筋の建ものの三階にあった。講義室なども国文学関係の講義はほとんどその建ものの中にあったように思う。

そのさくばくとした研究室が近藤先生が見

えられてからにわかに活気ずいて、研究会などがしばしばもたれたことを覚えている。

わたくしが先生の歌舞伎論を聴講する機会にめぐまれたのもそのころのことであった。古い「国文学誌要」が、今あるような「日本文学誌要」として再出発したのも近藤先生のおちからぞえによるものであった。

わたくしは昭和六年に卒業したのだから、昭和七年に法政で講義をはじめられた近藤先生をもちろん知るよしもなかったのだが、卒業後研究室の助手を嘱託されたからである。

法政に付属していた夜間商業学校の国語講師にするから昼間の助手を無給でせよというので講師に任命された。

この夜間講師たるや時間講師で月平均三〇円程度。程度というのは出講日が祭日や、学校行事などにかさなると、たちまち手当に影響するというのだから今から思うとなさけないほどのものであった。任命権者は当時の主任教授小山竜之輔先生であって、もちろん近藤先生ではなかった。小山先生も故人となられたと聞いている。

わたくしの無給助手時代は、二、三ヶ月でまもなく他に転じたのであるが、この二、三ヶ月の期間が、近藤先生やいまは亡き片岡良一先生にお会いする機縁になったのであるからありがたいと思わねばならない。

なお近藤先生の厳父、藤村作博士には在学中三年間つづけて西鶴や近松の講義をおききした。そのわたくしが土佐の大学で、近世文学の講義をやっているのだから人間の運命などふしぎなものだと思う。

（高知大学教授）

「文化講座」のこと

―当時の聴講生T氏と語る―

鈴木福五郎
（昭和一一年三月卒業）

S　早速ですが、何か文化講座のことを思い出してくれませんか。こんど「思い出」を書くことになりましたのでね。

T　あれはいつ頃でしたかね。

S　昭和一三年です。

T　二五、六年前の話ですね。もうそんなになりますかね。

S　講師の顔ぶれで記憶に残っている方は？

T　そうですね。片岡良一さん近藤さん本多顕彰さん佐藤信衛さん谷川徹三さん樺俊雄さんそれから飯島正さんあたりの名は覚えていますが。

S　講義で記憶にあるものはどんなものでした。

T　それがどうもはっきり記憶にないのですが、ただ、あらえびすさんの音楽（レコード・名曲）解説と中島健蔵さんの欧洲文芸史の話は面白くうかがいましたね。

S　映画論の岩崎昶先生や舞踊の芦原英了先生などはいかがでした。

T　芦原英了さんはおられましたね。確かにおられました。

S　あの時の聴講料は三円だった筈ですが。

T　へえェ、三円でしたかね。私があの当時謡曲の稽古に行くのに月謝が三円でしたから……。そうそうその位だったでしょう。

S　あの当時の法政は実にケチ臭くてね。『文化講座』も独立採算制でやれというような、しみったれた話だったので、講師への謝礼も外部からお願いした方が五円。内部の先生方は四円で、先生によっては無報酬でした。謝礼として差上げるのは恥かしかったので、「お車代」としてお納めいただきましたが、今になって考えてみれば良